日本文化部会

【概要】

須　田　華　那*

はじめに

2023年11月4日、第18回国際日本学コンソーシアム日本文化部会がオンラインにて開催された。今回は「日本文化の中のバーチャル」というテーマのもと、学生3名と教員1名による研究報告が行われた。

1. 邱冠禎（お茶の水女子大学　学生）
「唐帝国への貢ぎ物について―踊り子を中心に―」

各国から唐へ献上された踊り子の分析を通して、当時の唐において踊り子が外交・政治上の役割を果たしたことを検証する報告である。踊り子の献上のなかでは、中央アジア（とくにソグド国）から唐への「胡旋女」の献上記録が最多であるのに対して、東アジアからの献上は渤海が「日本国舞女」を献上した一度にとどまる。公妓となった踊り子は宮中・役所・軍営に所属し、壽安公主のような皇帝と踊り子の子どもも存在した。

また胡旋女は、玄宗朝後期の内乱の原因の一つとして社会問題化した。胡旋女に対する批判は、当時の詩から読み取れる。

参加者からは、唐との外交における踊り子献上の意義とはどのようなものであったかという質問がなされ、報告者は胡旋女が唐の政治に介入した点を指摘した。今後は、東部ユーラシアにおける婚姻と政治・外交関係を視野に研究を進めていくと結ばれた。

2. 潘蕾（北京外国語大学・北京日本学研究センター　教員）
「院政期の『乳母の家』の役割に関する考察」

古代末期における乳母（めのと）を実母に対する「バーチャル」な存在と捉え、院政期の「乳母の家」の成立状況を検討した。乳母は母乳の確保に加え、キサキの次の妊娠時期を早めるために天皇家に定着した。平安前期までの天皇家の乳母は五位止まりであったが、摂関期以降は三位を与えられ、典侍となることが増えた。さらに院政期には、乳母とその家族が目覚ましい進出を遂げる。

堀河天皇・鳥羽天皇・崇徳天皇の乳母を選定した白河院は、新たな「乳母の家」の確立、すなわち天皇家の後見としての「乳母の家」を創出し、複数を並立させることを目指していた。

質疑では、乳母の家柄とキサキの家柄の違い、「乳母の家」から出るキサキの割合など、キサキと乳母に関わる点について議論が交わされた。また、摂関期以降に乳母の地位が向上する背景や、乳母自身にとって乳母となることの意味を問う質問が寄せられた。

＊お茶の水女子大学・院生

3. バフヴァロヴァ・アナスタシヤ（お茶の水女子大学　学生）
「近世西日本における遊女の動向—下関を中心に—」

本報告では社会構造論と女性史・ジェンダー史研究の総合を目指し、遊女であった「きぬ」という女性の記録「口上覚」を用いて、「きぬ」の意識と遊所としての下関の社会について論じた。

「きぬ」は大坂→京都二条新地→新吉原と移転し、一旦は身請けされた。その後も尾道・讃岐・下関へ売られる危機に晒されたが、出身地・浜田に帰る決断をしている。下関は、海運の発展とともに発展した交易と遊興の地であり、下関の流動性の高い人々が遊女の生活を支えたと考えられる。また、史料にみえる「旅人 女」は遊女を表すと考えられると指摘した。そして、「きぬ」は自身が商品化された自覚を持ったうえで、自ら遊女を脱する決意をしたと評価した。「旅人」を遊女と判断できるか、という質問に対しては、人数の面から妥当であるとの回答があった。下関以外での同様の研究の可能性など、今後の展望に関しても質問が寄せられた。

4. 大野舞（パリ・シテ大学　学生）
「日本の『新書』の形が目指したものとその変遷」

本報告は、1938年の「岩波新書」をはじめとする日本独自の「新書」について、文化史としてではなく、その生産過程を通して物質として捉えたものである。分析のキーワードは、「教養」である。

まず物質文化としての本とは、著者・編集者・書店・読者などが相互依存して作成されると述べた。次に本の二重性を指摘し、商品としての本（読者が望むもの）と、文化財としての本（読者が望むべきもの）のバランスを取るために「教養」が重要との仮説を立てている。最後にはデジタル化がもたらす影響についても触れられた。

新書が日本独自である理由は何かという質問に対しては、大衆との断絶が無く、階級で分断されない「教養」の存在が重要であるとした。ただし報告者は、時代によって「教養」の内実が変化していることを指摘した。また質疑では、新書を物質として捉える視点で電子書籍をいかに考えるか、という視点も示された。

おわりに

各報告者が「日本文化の中のバーチャル」というテーマを自身の研究に即して解釈することで、緩やかな統一性を持った、個性豊かな報告が集結した。オンライン開催ではあるが質疑応答も活発に行われ、研究の展開と国際的な交流の両面から非常に有意義な部会となった。